万年筆（まんねんひつ）の秘密基地（ひみつきち）

第8回

書くだけじゃない！見て・さわって楽しい万年筆

えらぶ

みなさん、こんにちは。『万年筆の秘密基地』です。万年筆を手にするなら、書き心地だけでなく、見た目や手触りもこだわりたいですよね。今回は、万年筆を選ぶうえで気になる、素材と装飾の魅力をご紹介します！

素材で広がる、個性豊かな万年筆

現在、万年筆には色々な素材が使われています。どんな素材がどんな触り心地か、代表的な例を紹介します。

エボナイト

万年筆が発明された頃に誕生したエボナイト。金属と肩を並べるほど丈夫な素材で、独特なゴムのような香りと、手に吸い付くような質感が特徴です。エボナイトは漆のノリが良く、漆を使った商品にも軸の素材として採用されています。

エボナイトについて、詳しくは ➡ 第6回『万年筆の秘密基地』初期の万年筆

※上記画像の商品は現在、製造終了しています。

?? エボナイトと漆はとっても仲良し

エボナイトと漆の相性が良いとされる理由のひとつに、漆が密着しやすい表面をしていることが挙げられます。エボナイトには、表面にわずかな凸凹があり、漆が定着しやすいのです。

金属

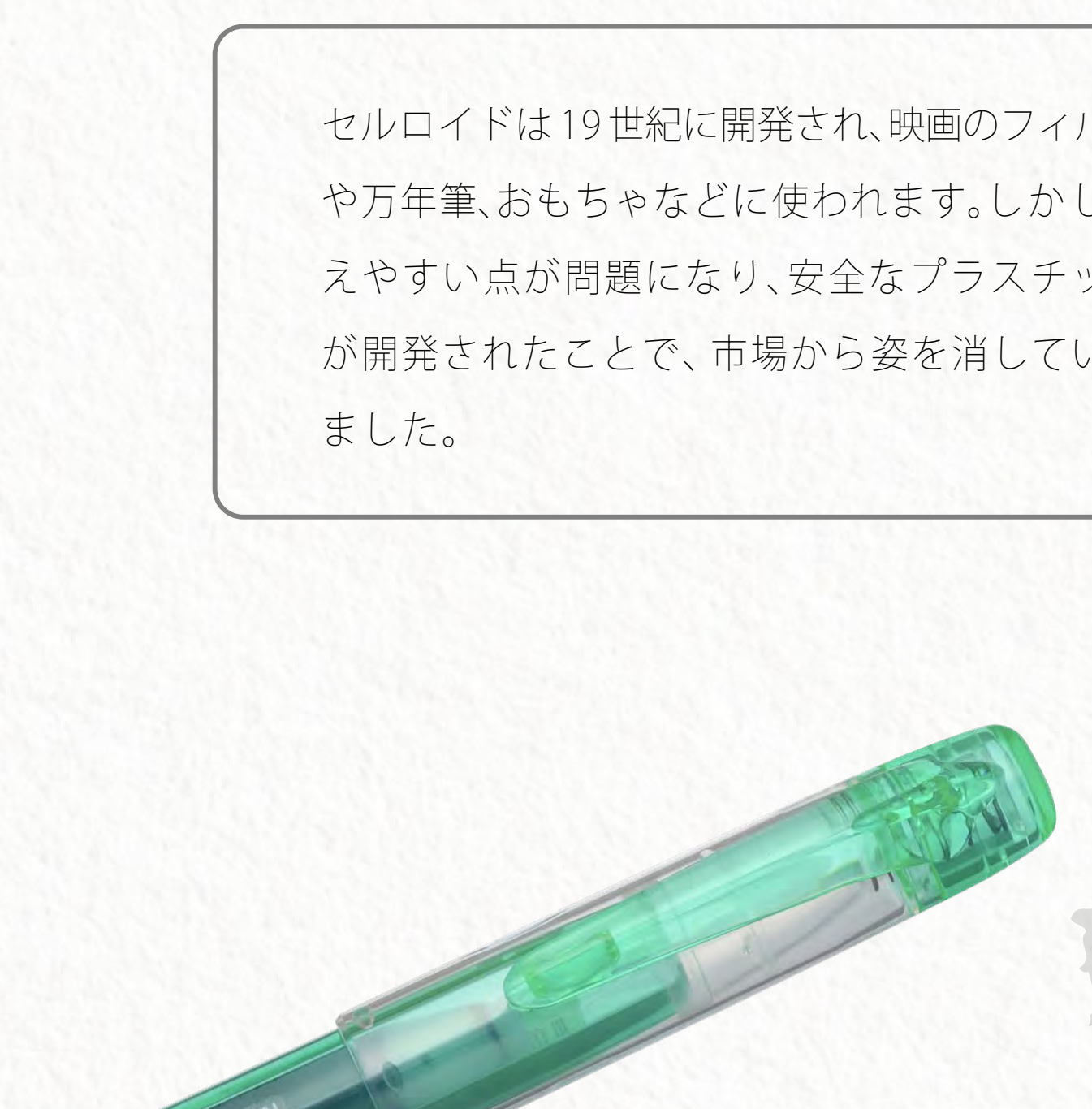
いわゆるメタル素材で、万年筆ではアルミや真鍮などが使われます。当社では、銀やプラチナを軸に用いた万年筆も。金属ならではの光沢と、ひんやりとした質感が高級感をもたらします。切削面がキラッと光るので、模様を彫った商品もよく見られます。

セルロイド

プラスチックの元祖とも言える素材。現在セルロイドを作るメーカーが減り、セルロイド製の万年筆は希少になりました。原料の混ぜ方や色の入れ方、カットする方向によって1つ1つ違った模様になるのも、セルロイドの魅力のひとつです。

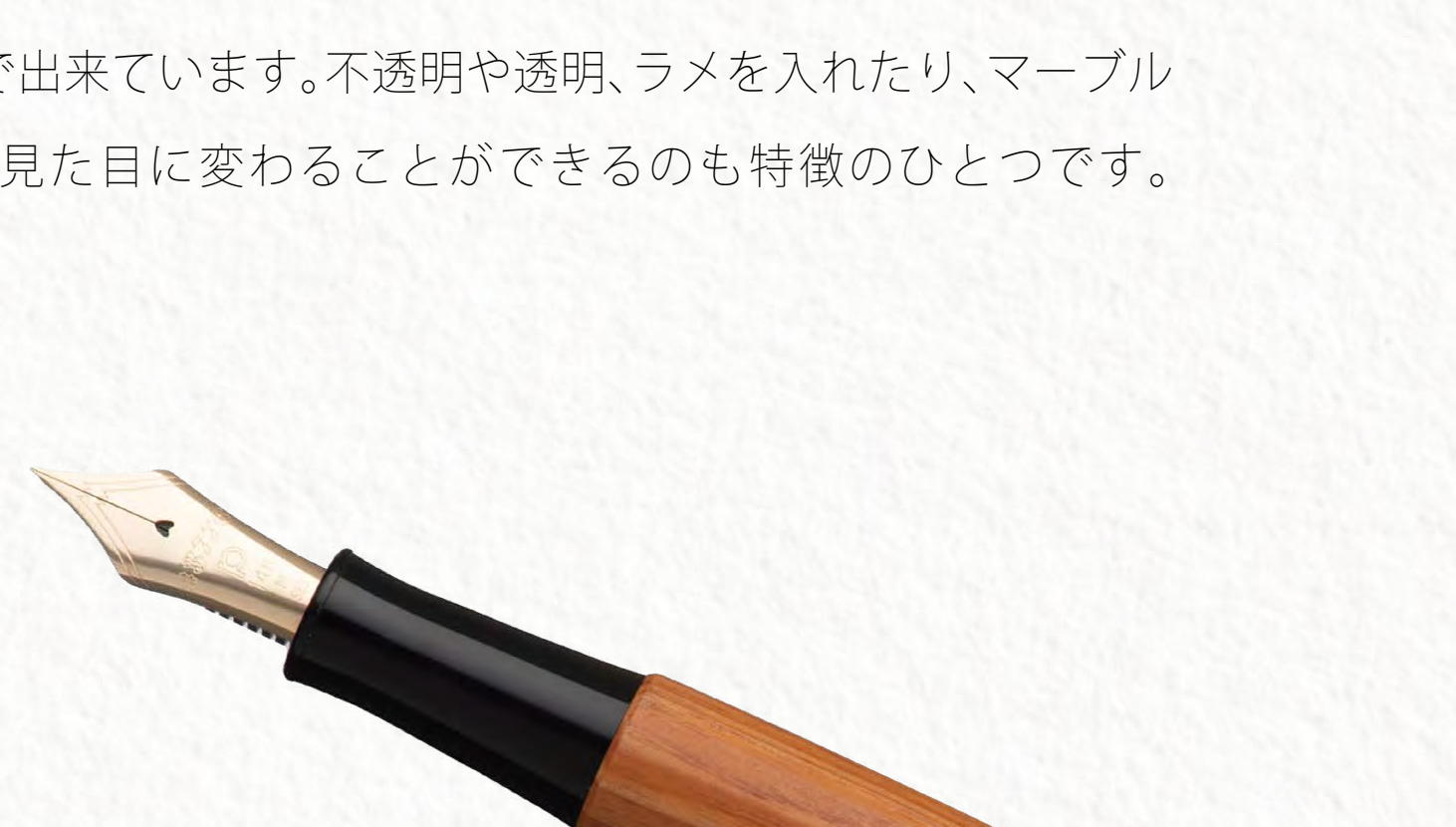
?? セルロイドの歴史

セルロイドは19世紀に開発され、映画のフィルムや万年筆、おもちゃなどに使われます。しかし燃えやすい点が問題になり、安全なプラスチックが開発されたことで、市場から姿を消していきました。



プラスチック（合成樹脂）

技術が発展し、セルロイドよりも安全な素材として石油が原料のプラスチックが誕生。現在、身近なものの多くはプラスチックで出来ています。不透明や透明、ラメを入れたり、マーブル模様にしたりと、色々な見た目に変わることができるのも特徴のひとつです。

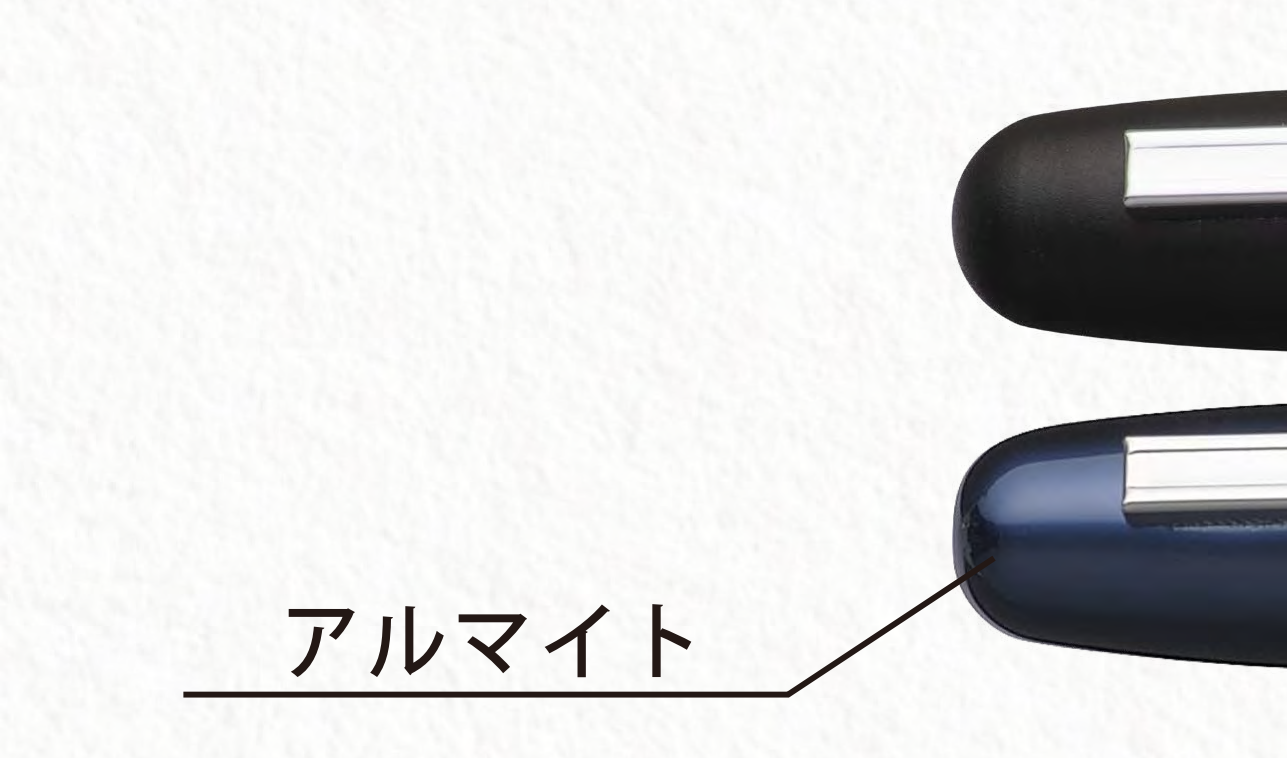


自然素材

木や竹などの自然素材も、万年筆の軸に使われます。素材ごとに重さや触り心地も変わります。中には独特な柄を持つものもあり、自然素材ならではの1本1本の違いを楽しめます。

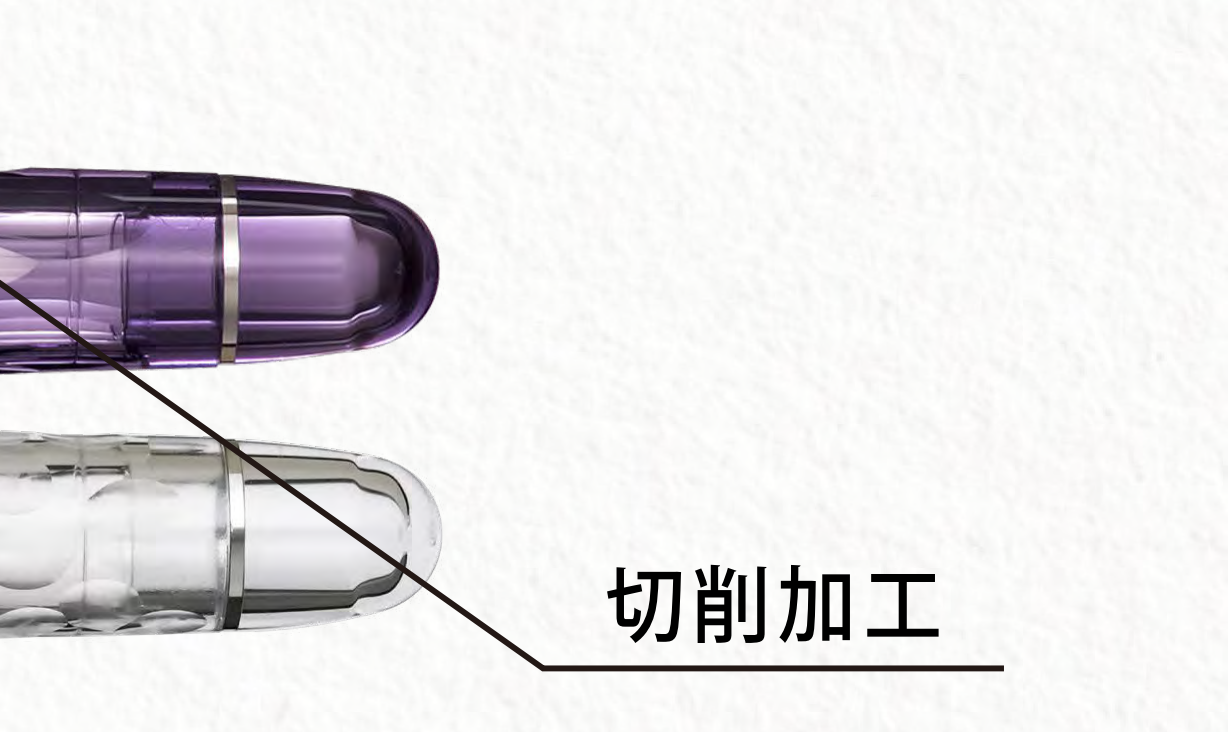
心躍る！こだわりの仕上げ

素材だけでなく、部品になった後で施す、「塗る」「削る」「飾る」といった加工によって見た目も手触りも変化させることができます。あなたもきっと「これだ！」と思える1本に出会えるはず。



塗装

万年筆の軸に塗料を塗ることで、色をつけたり、質感や見た目を変化させます。単色はもちろんのこと、グラデーションやマーブル調の模様を施すこともできます。トップコートや塗料に粒子を加えることでツヤを出したりマットにしたり。またラメやパール剤を入れてキラキラさせたり、金属粉を入れてメタリック調にすることもできます。

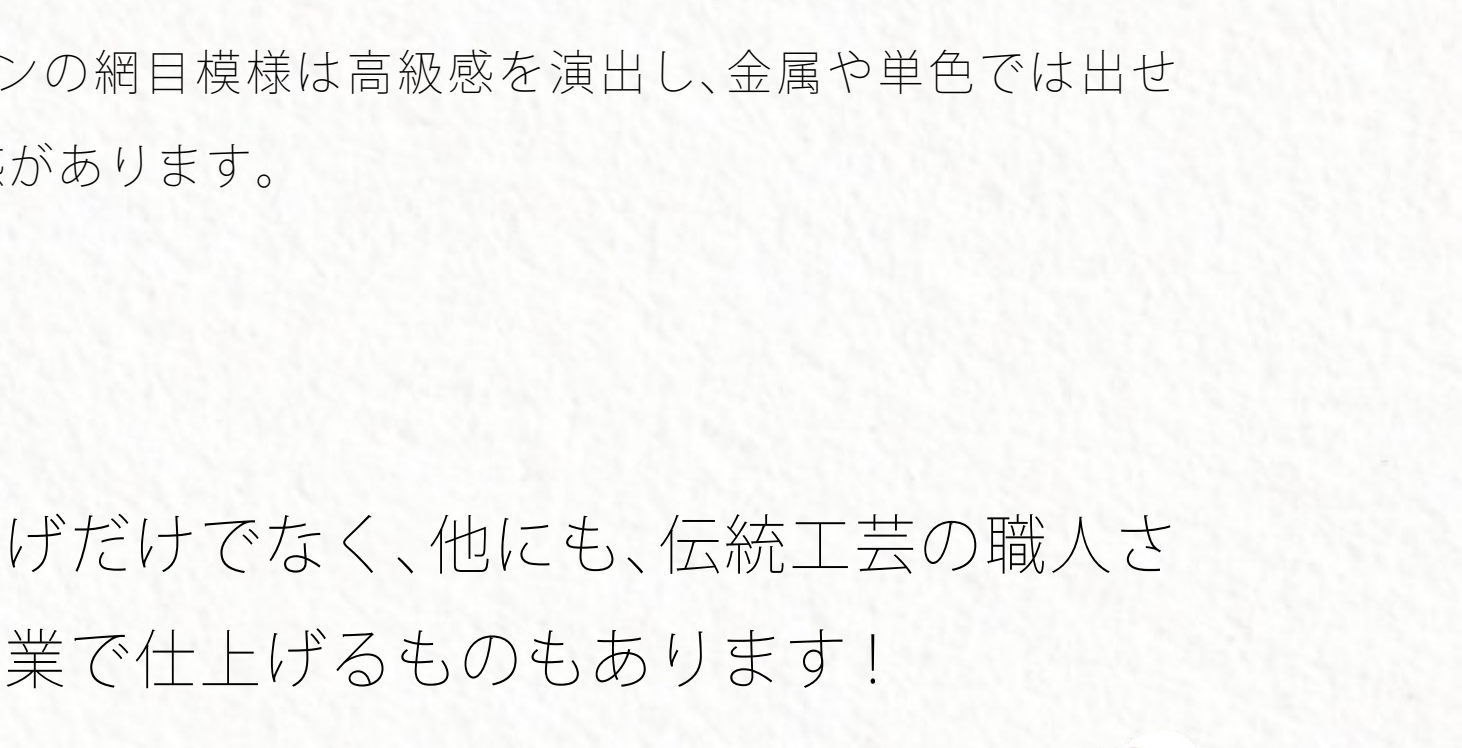


アルマイト

アルマイトは、塗装と同じように、素材の表面に加工をする方法のひとつで、アルミニウムに対して行います。万年筆だけでなく、水筒やスマートフォン、自転車のパーツにも採用されています。金属ならではの上品さを活かしつつ、色や質感を変えることができます。

切削加工

刃物を使って、万年筆本体の表面を削ります。刃物のカタチや削り方次第で、万年筆の軸にたくさんの表情を作り出すことができます。



巻き加工

万年筆のベースとなる軸に、革やカーボンといった異素材を巻く手法もあります。革はしっとりとした質感で、色やツヤなどの変化を楽しむことができます。カーボンの網目模様は高級感を演出し、金属や単色では出せない深みや立体感があります。

工業的な仕上げだけでなく、他にも、伝統工芸の職人さんたちが手作業で仕上げるものもあります！

漆芸 蒔絵（まきえ）

漆器の装飾として知られる、日本の伝統的な技法です。漆で絵や模様を描いたあと、金や銀などの金属粉をふりかけます。そうすることで、絵柄が浮かび上がるというものです。蒔絵には、「高蒔絵」「平蒔絵」「研ぎ出し蒔絵」などの種類があります。

漆芸 螺鈿（らでん）

貝殻の内側にある美しい真珠層（主に夜光貝、青貝、アワビなど）を、さまざまな形に切り、1つ1つ手作業貼つける技法です。光を反射して虹色に輝く姿は、まるで宝石のように華やかです。

竹編み

竹を細く割って編み、形を作る技法です。竹編みは、縄文時代から生活用品を作る技法として受け継がれて来ました。その編み方はとても緻密で、現在では工芸品として認知されています。「茣蓙目（ござめ）」や「横網代（よこあじろ）」などの編み方があります。

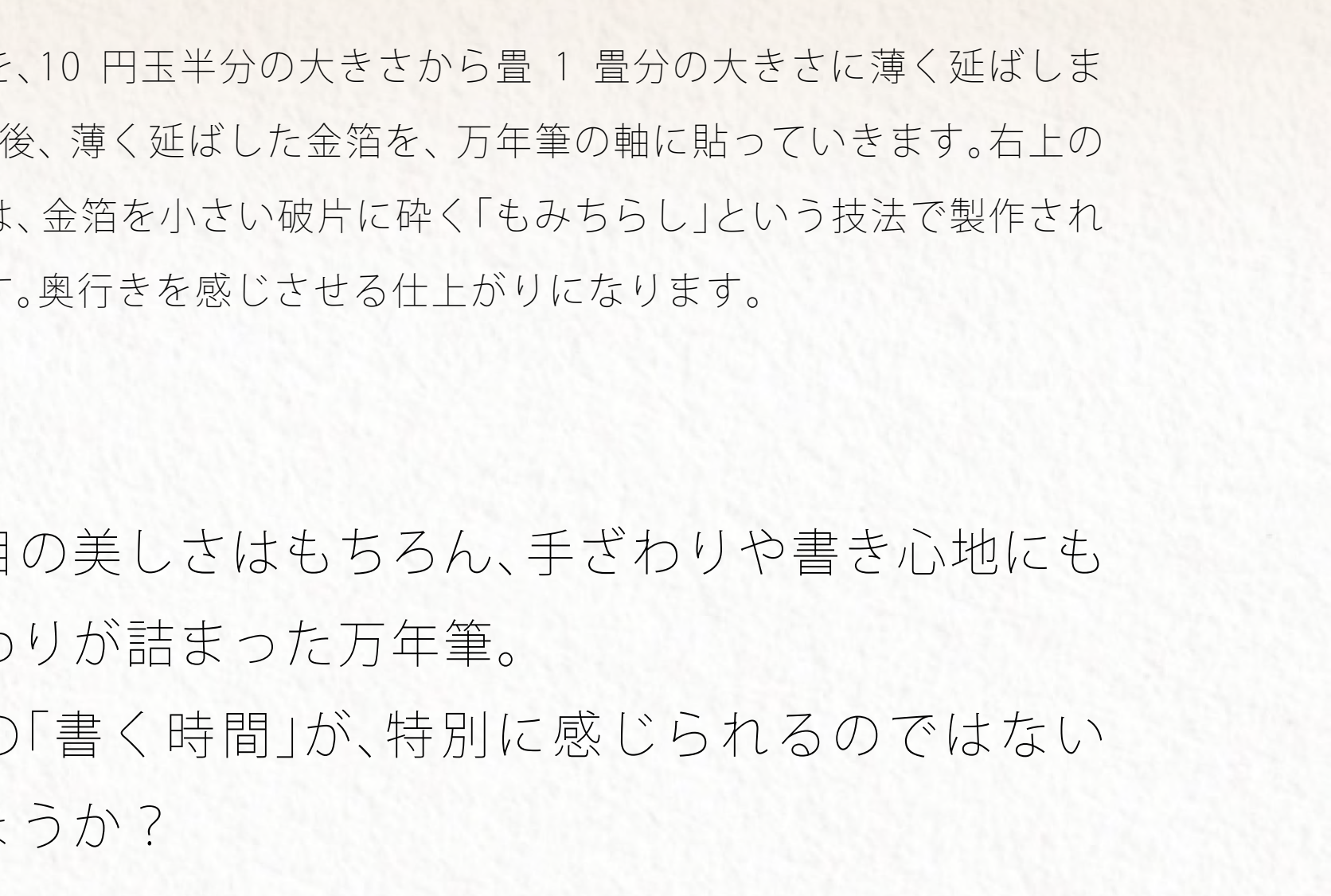
肥後象嵌（ひごぞうがん）

熊本県（旧肥後国）に伝わる金工技法と工芸品で、鉄の地金に金や銀を嵌め込んで模様や絵を表現する伝統的な象嵌技術のひとつ。黒く仕上げた鉄に金や銀を埋め込むことで、黒と金・銀のコントラストが際立つ仕上がりになります。

鍛金（たんきん）

鍛金は金属工芸の手法のひとつで、金槌や木槌を使って金属を叩いて形を整えます。その金属を叩く過程で生まれる「槌目（つちめ）」という模様が美しいとされ、装飾としても取り入れられるようになりました。「槌目」の凹凸は手作業でつけられるため、唯一無二の柄になります。

金箔



金の塊を、10 円玉半分の大きさから畳 1 畳分の大きさに薄く延ばします。その後、薄く延ばした金箔を、万年筆の軸に貼っていきます。右上の万年筆は、金箔を小さい破片に砕く「もみちらし」という技法で製作されています。奥行きを感じさせる仕上がりになります。

見た目の美しさはもちろん、手ざわりや書き心地にもこだわりが詰まった万年筆。毎日の「書く時間」が、特別に感じられるのではないでしょうか？

今回は、万年筆の軸の素材や魅力、装飾について紹介しました。万年筆は書くだけでなく、見ても触っても魅力的なんです。

次回は、実際に万年筆を使って書いていきます。お楽しみに！

PLATINUM
JAPAN 1919